

田中益三著 『長く黄色い道 : 満州・女性・戦後』

波瀲, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院助教授

<https://doi.org/10.15017/11028>

出版情報 : 九大日文. 9, pp.99-100, 2007-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



◎ 書評

田中益三著

『長く黄色い道―満洲・女性・戦後』

NAKAYAMA
TAMIKAZU
波瀲 剛

満洲と文学、女性と文学、戦後と文学。こうしたタイトルの単行本や雑誌の特集なら最近出ていそうな気がするし、実際いくつか頭に浮かんできたりもする。しかし、「満洲と女性と戦後」というキーワードで貫かれた本に出会ったのはこれが初めてである。

本書は三部から成る。著者はまず、「はじめに」に続く第一部において、平林たい子、西崎キク、牛島春子、望月百合子、藤川夏子の足跡をたどっている。

最初に論じられている平林たい子は、『文芸戦線』のプロレタリア作家として、あるいは植民地との連帯を描いた小説「敷設列車」(『改造』一九二九年二月)の作家として知られている。この「敷設列車」を分析する前提として著者が注目するのは、彼女が一九二四年一月から九月にかけて恋人とともに大連に渡り、失意のなかで帰国した点である。だが、これは渡満の経験と「敷設列車」とを単純に結びつけた発想ではない。

むしろ、「女性が満洲という存在に振り回され、その挫折か

ら自己と植民地との自覚に目覚める、というパターン」が「戦後的というなら、平林はそれを先取りしていた」(二二頁)点で重要視されているのである。そのうえで、満洲での「体験の昇華を願い、その私憤を晴らす作品を書き連ねた後」(四二頁)、「満洲を媒介にして私性を去る」(四〇頁)方向を目指した「敷設列車」を、さらに戦後に見られた「左翼文学」に対する「自省の念」を丁寧に分析している。

平林とは対照的に、西崎キクはこれまでほとんど注目されてこなかった人物である。彼女は一九三〇年代前半に女性飛行士として活躍し、一九三四年には朝鮮半島経由で満洲訪問飛行を成功させている。しかし、日中戦争が始まると活動の場が減少し、三八年満洲国北安省通北県に移住。開拓移民について文章を残した。

本書を読むなかでこうした彼女の履歴に触れて新鮮な驚きを感じるのと同時に、彼女のファッションの変遷にも興味を抱くことになる。収録された四点の図版には、練習用飛行機の尾翼に立つ「飛行服姿」に引き続いて、開拓村の移民団長とともに「飛行服」で撮影された西崎、モンベ姿の女性たちと並び、「洋装姿」で「モダンな帽子を阿弥陀に被り、たわわな稲穂を抱えて微笑んでいる」(六三頁)西崎、満洲の農地を背景に「釦が並んだブラウスにベルトをあしらった」上着に「スラックス姿」(七一頁)で両腕に大根を抱えている西崎、と満洲移民のイメージとはかけ離れた彼女の姿が写し出される。

いずれも満洲開拓の風景に画一的な印象を抱きがちな私にと

つては非常に興味深い資料である。そればかりでなく、最近読んでいた論文で、ちょうど崔承喜のヨーロッパ、アメリカ公演と衣装の変化に関する分析がなされていたことと合わせて、戦時中のファッションについて考えてみたくなるような知的好奇心を喚起するものだった。

西崎に続く牛島春子、望月百合子、藤川夏子の三人は、いずれも著者との交流があった人物である。ご当地という点では福岡出身の牛島春子の名を聞いたことがある人もいるだろう。彼女は一九三六年に渡満し、「祝といふ男」(『満洲新聞』一九四〇年九月〜一〇月)で芥川賞候補になったことでも知られている。また、『女人芸術』の同人であった望月百合子は、一九三八年に渡満。満洲新聞社記者となる一方で、大陸文化学園、丁香女塾を立ち上げ学校教育による文化の創生を試みた。藤川夏子の場合は一九三五年に渡満し、大連芸術座の結成に関わり、満洲での新劇運動を展開している。

彼女たちは一九二〇年代後半から一九三〇年代前半にかけて、いわゆる「左翼運動」に参加、挫折を味わい、その後満洲に渡るといふ共通点を持っている。彼女たちは新天地にそれぞれの夢を託したのだが、その夢もふたたび破れて日本に戻ってくる。そして、夢から覚めた後、長い間、自分と満洲との関わりを問い続けることになる。著者はこうした彼女たちの経歴を即座に断罪することなく、戦後における長い自問自答の軌跡を、インタビューの思い出などを紹介しながら、かみしめるようにたどっている。

文学が中心となる第一部の後、第二部では映画、コミック、歌謡、ジャズなどへと範囲を広げ、李香蘭、川島芳子、竹宮恵子、戦時歌謡の女性像、中林庫子、秋吉敏子が論じられている。さらに第三部は、満洲国以前、あるいは残留婦人の問題へと範囲を広げ、「満洲と女性の問題は、コロニアリズム、ナショナルリズム、ジェンダーが交錯する地点において像を結ぶ。世界の動きを考慮に入れれば、依然として未決の現代的課題でもある」(二四八頁)と指摘する論考「始まり、そして終わりのないものへ」が収録されている。

著者は「あとがき」で「本書はいわゆる研究書の体裁は取っていないし、ましてやフェミニズム論でもない。満洲を媒介にして織りなされた私的関心による人物記であり、ドキュメンタリー的な風味を取り混ぜた私的な女性論に過ぎない」(二五四頁)と断っている。しかし私は、大上段に構えず、しかも微視的な次元にとどまらないという著者の姿勢が、こうしたスタイルを要求したのではないかと思う。植民地文学に関する長年の調査と省察をふまえて、なおかつ平明に書かれた、知的発見に富む一冊である。

(二〇〇六年六月 せらび書房 二八一頁 二四〇〇円＋税)

(九州大学大学院比較社会文化研究院助教授)